

「一人旅が好きなA君」

1. 動機
2. インタビュー
 2. 1. 一人旅を通して
 2. 2. 異文化理解
3. 結論
4. 終わりに

1. 動機

私は日本に留学して来てから、いろいろな国から来た、様々な個性を持つ人々と知り合い、貴重な出会いをたくさん積んできた。その中では、私は初対面のときに深い印象を与えてくれたA君に特に魅力を感じた。A君と初対面の会話は、はっきり覚えていないが、A君が先に声をかけてくれたことは印象深かった。皆さんはこれが大した事ではないと思うかもしれないが、日本人が自ら友達としての手をさし伸ばしてくれたことは、当時の私にとっては珍しいことだった。なぜかという、私の経験によると、多くの日本人学生が留学生と友達を作るのに消極的であるため、留学生が日本人の友達が欲しいなら、積極的に日本人のグループに入ろうと努力しなくてはいけないと感じていたからだ。そこで、A君が私に声をかけるというフレンドリーな態度を示してくれたとき、私の気持ちはうれしいというより驚いた。なぜA君はこんなに親切に留学生と接しているのか、とずっと不思議に思っていた。その後、学校で何回もA君と話したら、A君の豊富な海外旅行の経験を知り、もしかしてA君の外国人への親切な接し方は、今までのA君の海外旅行の経験などに影響されているのではないかと思った。

このように、A君が親切に接してくれたことをきっかけに、A君と友達になり、いろいろ話したら、A君は私にはできないし、したくもない、一人旅が大好きな人間だとわかった。A君と話するとき、時々A君の旅行の話が出て、旅行の話を語っているA君は、いつも生き生きしていて、旅行を楽しんでいることが私にも伝わってくる。一人旅の楽しさを存分味わっているA君にさらに魅力を感じたのである。私は一人旅をすることをまったく楽しいとは思わなかった。しかし、A君に出会ってから、一人旅に対する見方は少しずつ変わってきた。A君の一人旅の話を聞いて、一人だからこそ色々な面白い出来事や素晴らしい出会いを経験することができるのだということがわかった。一人旅だと、人との出会いが増え、人々との出会いの中で、何らかの出来事が起きたりして、まったく知らない人と

友達になったりすることは、一人旅だからこそ楽しさだ、ということはA君が教えてくれた。このように、A君の話を聞いているうちに、一人旅でも楽しめることを納得するようになり、私も一人旅に挑戦してみたいなあと考え始めた。

私自身は日本に留学しに来てから、様々な国から来た人と友達になって、カルチャーショックを体験したり、他国の文化や習慣を理解したりしてから、異文化を尊重するようになった。このようにA君の一人旅による影響と、私の留学による影響はどこか似ているところがあると思う。そこで、インタビューでは私の日本留学の経験とA君の海外旅行の経験を照らし合わせて、二人が、ある意味で同じような「一人旅」によって受ける影響の共通点と相違点についても考えていきたい。特に、一人旅はA君の人に対する接し方にどのような影響を与えているのかを明らかにしたい。

2. インタビュー

2.1. 一人旅を通して

私の日本での留学生活は今年で五年目になる。この五年間で色々な出来事があって、これらの一個一個の出来事によって、私が無意識のうちに影響されてきた。人間は常に変化すると思う。特に環境が変わったとき、自分に起きた変化を意識しやすくなると思う。これはあくまで私自身の考え方だが、私が日本に来てから、考え方がころころ変わっているということをすごく意識するようになった。性格は根本的に変わっていないが、物事に対する考え方がずっと進行形で変化している。そこで、数多くの旅を重ねてきたA君も、私と同じように、旅をしているうちに自分は何かが変わったということが気付いただろう、また、それらの旅の経験はA君が人に対する親切な接し方と関係しているのではないかと考えた。それで、一人旅がA君に与える影響を中心にインタビューを行った。

まず、A君の今までの旅の経歴を簡単に紹介する。A君は中学のときから、海外への強い憧れを持っていた。海外に行って、どこかで放浪したり、見知らない土地へ行って、そこで暮らしてみたいという夢をずっと思い続けてきた。高校を卒業してから、一年間の浪人をして、早稲田大学の商学部に入った。大学の一年生から三年生の間、エジプト、ヨルダン、シリア、トルコ、中国、パキスタン、タイ、ベトナムなどで、一人旅をしていた。三年生の終わりに進学するつもりで休学して、十ヶ月にわたって、タイ、ビルマ、インド、パキスタン、イラン、トルコ、カンボジア、ベトナムを長期の旅行していた。日本に戻ってから進学することをやめ、日本の会社に就職したが、一年後、会社をやめて大学院に進学した。私はそこでA君と出会った。A君は大学院でベトナム研究を専攻し、一年間ベトナムのハノイでフィールドワークをした。

(1) 何事も一人でやるようになった。

ずっと海外への強い憧れを持っていたA君は、大学時代になってからやっと海外へ行くことができ、一人で放浪するという夢を実現した。A君は一回目の旅に出た後の自分の変化を語った。

林：人生初の旅はA君にとっては刺激だったでしょ。一回目の旅から帰ってきた自分は、何かが変わった？

A：大学に入るまで、結構授業勉強とかしていた。試験に受かったけど、それは俺の力じゃないもんと思うの。勉強したのは俺だけど、やっぱりいろんなアドバイスとかさ、兄貴に聞いたり、助けてもらったりしてた。両親もその時期、結構気を使ってたと思うんだ。結局俺一人じゃ、受かったもんじゃないと思った。旅から帰ってきて変わったのは、自分が大学の授業に出るようになった。一年生の頃、人頼みだったよね。授業に出てる人にノートを借りて、テスト前一夜漬けでやってた。でも、旅に行ってから、すべての授業は自分で出るようになったし、人に頼らなくなったのかな。今は一つの例えだけどね。何事も結局は自分でやるようになったよね。

ここで聞き出したA君が一回目の旅に出た後の変化は人との接し方とは直接関連していないが、お兄さんの助けや、親の気配りに意識しているA君が、人の支えを大事にしていることが感じられる。A君が人の支えを大切にしながら、一人旅を通して自分を鍛えることによって、自立とした人間を目指そうとしているのである。このことから、一人旅をする前、A君にもうすでに良い本質を持っているとも言える。ここまでの話を聞いて、一人旅の経験はどのくらいA君の人に対する接し方に影響を与えているのかが少し気になってきた。

(2) ありのままの自分を素直受け入れる。

A君は大学の一年生から三年生まで、ずっと単発旅行をしていたが、大学3年生の終わりに、休学して、十ヶ月にわたって長期旅行をしていた。ここでは、私は長期旅行の方がA君の人との接し方に大きく影響する、または単発旅行と異なる影響を与えるのではないかと推測した。そして、A君の長期旅行後の変化について尋ねたら、A君は自分のことを素直に受け入れるようになること、また、旅に対する見方が変わってきたことと答えてくれた。この答えは私の期待していた人に対する接し方の変化ではないが、そのような変化が起きたA君に改めて魅力を感じた。

林：今までの単発旅行とは違った長期旅行をした後、自分がすごく変わったと感じた？

A：いや、俺は俺だね。変わってないよ。変わっていないというのは気が付いた。それは成長だよ。よくどこ行ったらさ、人間が変わるよって言うじゃない。俺はそうは思わない。やっぱりその人はその人。長期旅行までは、自分が変わってないとは思ってなかったんだろうね。なにかにしる変わったと思ったんだろうね。最初は、旅行することも楽しむんだけど、それだけじゃなくて、なんか修行するみたいな、自分を鍛えていくみたいな考え方が強かったと思う。いろいろ経験しているから、自分が特別なんだとかってというのは、その前の旅行のときちょっと考えたかもしれないね。でも、一年間行ってきてさ、そうしたらもう、そんな違いなんて、ささいなことだなあみたいな、別にそれぞれ価値観が違うっていいから。なんか素直になった。あるがままの自分を受け入れていいやってさ、無理しなくてもいいかなって。一番変わったのは旅行に対する見方じゃないの。自分の中身がどう変わったのか分からないけどさ。自分が持っている、旅行者に対する考え方とかは、すごい変わったよね。それまでは、誰も行かないところに行って、なんか自分が一人でやってるっていうのが、それこそが楽しい旅なんだと思ったところがあったけど。だけど、旅でいるんな人と会って、話しているうちに、別にツアーでもいいし、その本人が楽しいと思えば、旅は何でもいいのかと思った。別に一人旅にこだわることもない。一人旅だから、生きがいがあるとかさ、俺が一人旅をしているんだ、あんた達と違うよとかさ、そういうなんてなんか、全然意味がないことじゃないみたいな感じ。

ここまでA君の話を聞いてきて、非常に面白いと思ったのは、一回目の旅を出た後、A君は何事も他人に頼らず一人でやるようになったと言ったのに、ここでは結局自分が変わらないということになった。一見矛盾しているかもしれないが、私はこのことを理解することができる気がする。それは、私が日本に来てから物事に対する考え方がずっと進行形で変化しているが、性格は根本的に変わっていないということと同じことだと考えてもいい。ここで私がA君と共感できる点は、旅なり、留学なり、そこで自分の体験したことによって、何らかの影響を受け、考え方が変わったりすること。また、自分の体験したことは、場合によって自分をよくするかもしれないが、変わらない本来の自分がいるということを知ること。ただし、それを察知するまでには時間がかかると思う。私も最初自分が留学したことを心の中で自慢していたが、時間がたつにつれて、大きくなった自分がだんだんもとに戻ってきた。戻ってこられたのは、歳月がたったからではなく、送ってきた歳月の中で成長したものがあるからだと思う。五年目の留學生活を迎える自分を見ると、日本に住んでいる15万人の留学生の中の一人だと思う。しかし、この五年間、人々との付き合いを通じた異文化の接触など様々な体験の累積は、私の視野を広げたし、私の考え方はそれなりの影響を受けたので、それは私しか持っていない宝物だと思う。一方、他の人も彼らしか持っていない宝がある。そこで、みんなそれぞれ自分の体験を大事にして、そこから何かを学べばそれを自分の宝物として自慢すればいいと私は思う。

(3) 人というのは非常に大事である。人の優しさをたくさん触れたので、自分もその優しさを返さなきゃいけない。

ここまでのインタビューは、A君が自分のありのままを素直受け入れるということに共感し、一人旅にこだわることから、旅を楽しめばいいというふうに変わってきたA君の旅への見方に感心している。しかし、一人旅がA君の人に対する接し方に与える影響はまだ聞き出していない。それで、私はA君に直接一人旅が自分の人に対する接し方に影響しているのかを尋ねた。この答に対して、A君は一人旅の影響があるだろうが、具体的にはどのような影響なのか自分も分からないと答えた。そして、私は日本から台湾に帰ったとき、友達に社交的になったと言われたが、自分はその変化に気付いていなかったことを一つのヒントとしてA君に話したら、A君が次のように話してくれた。

A：俺もあると思うよ。海外に行って、毎日違う人と接するんだよね。何をするにも、やっぱり知らない人に話をかけるからさ、ことばも通じないからさ、やっぱりいろいろ手振り身振りとか話したりする。そういうのを理解してて、かつ人に助けられているじゃん。やっぱり人っていうのが大事だなあと思う。海外に出たら、自分一人だけじゃ、助けなしでやっていけないことがわかるようになった。人と人の助け合いがありながら、生きていくのだということがわかった。旅中にいろんな人に助けられっぱなしだった。たくさんのお人の優しさを触れたから、優しくしてもらった分を相手に返したい。それに、優しくしてくれた人みたいに、人に優しくしたいし、より良い、優しい人間になりたいと思う。しかし、旅で出会った人は一回会ってから、もう会えないのはほとんど。すると、旅中に優しくしてもらっても、優しさを返すことができない。それで、人に優しくすることは二度とする機会がないかもしれないから、やれるうちにやると思うようになった。

この話を聞いたとき、私の胸にはすごく熱いものが湧いてきたと感じ、A君の魅力はストレートに伝わってきた。A君のこの話はまさに自分のこととかぶるような感じだった。私も留学している間、色々な方に迷惑をかけて、世話になりっぱなしでやってきた。自分がいつも恩を受けっぱなしなので、助けてくれた人に何かをしてあげたいという気持ちがすごく強くなった。もちろん、台湾にいたときも、誰かが親切にしてくれたら、うれしくなり、同じように親切にしたいと思う。ただ、A君が言ったように、海外にいと、人の助けなしでやっていけないので、そういう助けられる場面に出会う。私も日本に学んでいる間、自転車に乗っていて、酔っ払いの人がぶつかってきたとき、見知らずのホームレスのおじさんが助けてくれて、壊れた自転車まで直してくれたということを体験したことがある。このような出来事を数え切れないうらい経験してきた。私がお礼としてそのおじさんにコーラを渡した。コーラだけでは私の感謝の気持ちを伝えきれなかった。そのようなやりきれない気持ちがたくさんたまってきた。それは、そのおじさんだけでは

なく、これから出会う人にも優しい心で接していこうと思う気持ちの源になる。

2.2. 異文化理解

以上述べてきたように、A君が一人旅を通して、物事への取り組む姿勢が積極的になり、旅に対する見方を再認識するようになった。そして、旅行中いろいろな人と出会って助けられ、親切心を持つようになった。「海外から来た人が困っている状況になっているときに、気軽に助けてあげたいと思うね。そういうふうに助けられてきたし」ということばから、A君が一人旅の体験を通して、自分が体験したからこそ、その立場に立って人の気持ちが理解できるようになり、人にもっと親切したくなるだろうと思った。つまり、一人旅の体験によってA君の人に対する理解が深まっているといえる。ここで、その理解はA君の人に対する接し方にも影響があるのかという疑問が生まれてきた。そこで、次にA君が一人旅やベトナム留学をしているうちに、どのように人や文化などを理解しているのかという話に移った。

(1) 理解と納得

私が日本に留学しに来てから、いろいろな人との出会いや付き合いによって、どのように異文化を理解したらいいのかということを考えさせた。今まで私が考えた異文化理解とは、自分の国と異なる国の文化を理解することであった。「郷に入れば郷に従え」ということわざのように、異国にいと、その国の文化や習慣を理解するだけでなく、それに従わなければならないという義務を自分にかけていた。日本にいる間に、私は日本の文化に合わせようとしているが、それを納得して、本当に自分からそうしようとしているのではない。例えば、テーブルのマナーや上品なしぐさを求められるとき。そこで、私は異文化を理解することとそれを納得することは違うのではないかと思う。この思いをA君にぶつけて、A君がいろんな国を回ったり、ベトナムに留学しに行ったり、異文化に接する際に、どのように異文化を受け入れているのかを聞いてみたら、A君は次のように答えた。

A：もちろん理解しようとするね。理解はするけど、納得という形がどうか分からない。要はそういう行動をとるといのは、最初じゃおかしいと思うけど、そのうちに、あ、ちゃんと理由があるんだと分かってくる。そういうことをすることによって、その後の動きはスムーズになるとかさ、そうしなければ、そういうことを言わなければ、関係がギクシャクするとか、その理由はちゃんと分かってくるでしょ。分かって、たとえば、ベトナム人と接している場合ね、ベトナム社会で、何かをしなければならないというときは、同じような行動を取ると思うんだ。同じ行動を取れば、それで、彼らにその行動を認めてくれて、いろいろなやることに対して、彼らの中に受け入れられる。納得しな

くても、じゃ、納得しないからこれはやんないよと言ったら、そこじゃ、うまく行かないわけじゃん。頭で納得してなくても、こういう場面ではこうやるもんだ、だからこうやるよって、行動をするよね。頭は理解をして、おかしいというのを思い続けていても、そこの中の規則に従うほうは、理にかなっていると思う。

ここまでの話を聞いて、やはりA君も私と同じように、異文化を理解するけれども、それを納得していないというときもあるのだ。A君は納得するかどうかにかかわらず、その場を円滑に保つには、向こうに合わせて行動した方がいいと思っているようである。しかし、私の場合、その場に合わせるけど、やるときに心の中に反抗心を持っている。異文化理解というのは、表面的に理解するだけではなく、本当に自分の中からそうしたいと思って行動するということじゃないのかなと思う。心で反抗するという矛盾が生じたのは、結局自分の国の文化の方をこだわっていることになるじゃないのと友達に言われたこともある。私はどうしてもこの心の問題が気になる。このことをA君に伝えたら、A君は次のように話してくれた。

A：心からそうしたいと思っていないときもあるでしょう。やはり最後に頼るのは自分の考えじゃん。自分が育ってきた行動基準、自分が生まれ育った台湾の行動だと思うよ。それによってみんなが判断してる。だから当然だよ。自分の文化は核にあるよ、一番真中にドカンとあるさ。でかいものがあるって、それで、頭の中で違う文化を理解していくわけじゃん。すべて最初は日本の文化と照らしあせて、理解するわけだよ。最初の、一番の真中のもんはなかなか変わらないと思うよ。変える必要はないと思うし。自分の文化の方がいいんじゃないかというのは誰もは思ってしまうことがあるんだよね。ただそれが強くなりすぎるという問題だけだよ。でも最初はそう思っているけど、そこで暮らせば、逆に、いいものを持っているというのは見えてくるんだよね。自分の持っているものと比べて、あ、彼らの方は優れていると思うときもあるし、やっぱり俺らの方はすごいなあと思ってしまう部分も、それはあるよ。両方だよ。全部は全部、彼らの方に合わせて、彼らの理解ができて、そういうのは無理だと思うよ。

私は今まで、自分の中で理解と納得の間にギャップがあることを非常に気にしていた。なんで異文化に対して自分の理解がこんなに浅いの？表面的なレベルに止まっているの？と何回も自分に問い掛けた。しかし、A君は「そのギャップがあることは当たり前だよ、当然だよ。自分の理解を無理にして変える必要がない」と私と違う意見を述べている。異文化を理解する際に、まず自分を育ってきた文化背景、常識を通して異文化を考えるとというのは誰でも知っている常識だが、私が異国にいと、異文化を丸ごと飲み込み、それに合わせるべきだと思った。そこで、自分の「理解と納得との間のギャップ」という矛盾が生まれたのは理解が浅いと思った。ところが、A君の話を知ったら、そのギャップは異な

る文化がぶつかる時生まれてきた必然的な産物だと考えることができ、矛盾が生じないように避けるより、自分の実際の体験・経験を生かしてその矛盾を消化していくことが大事だと思った。A君の言葉は私に逃げ道を作ったのではなく、私に理解の原点に戻してくれたと思う。

(2) 先入観・偏見

A君の人に対する接し方という話を戻すため、私は最初日本に来たとき、他の国の人と接しする前、なんらかの先入観を持っていたが、それぞれの国の人と実際に接触したことによって、自分が国という枠でその人の性格を判断することはできないことが分かった。もともと自分の中にあった偏見や先入観をなくしたほうがいいと思うようになったという話をA君に話した。A君が自分と異なる文化を持っている人と接する際に、どのように考えているのかを聞いてみた。

A君は、私の考えと違い、偏見・先入観をなくすことが難しいと答えた。A君の話によると、一人旅をしている間、例えば、ある国で何度も騙されると、その国は人を騙すことが多い国だなあと感じてしまうところがあるので、それが偏見かもしれないと思っているが、どうしても国の枠組みで判断しがちになるそうである。ここで、A君が国の枠組みで人を考えるのは偏見なのかもしれないだと分かっているのに、そういうふうに思ったりするのは不思議で理解できなかったため、A君にその理由を聞いてみた。

A：いや、俺はそれはね、誰もがそうなんだよ。偏見を持たない人間はいない。別にそれは異文化に限らずにさ、普段の生活もさ、あ、ああいう人間だと思っちゃうときもあるじゃん。それは一つの偏見だよ。本当は別の側面を持っているかもしれないけど。

ここまでのA君の話を聞いて、A君が人間は偏見を持つのは普通であり、国はそれなりの特徴を持っていると考えているようである。そういえば、私の日本人が冷たいという先入観は実際日本人との付き合いによって、だんだん変わってきたが、やはり留学生が積極的に日本人に近づけないと、日本人のグループに入りにくいなあと感じる時もある。それが国に対する偏見なのか分からないが、それは自分が体験したことなので、否定されないと思う。この思いついたことをA君に話したら、A君があっさり同意してくれた。

A：あってるじゃん。逸蒼が感じたのも、なかなか話かけてくれないとか、なかなか友達になれないというのは、逸蒼が感じたように、それがもしかしたら、日本人というのは、冷たい、要は人見知りをしてさ、なかなか話をかけないとかさ、特に外国の人に対して、話をかけようとしなくてさ、そういう特徴を持っているのじゃないのかな。

林：じゃ、なんでA君はそういう特徴を持っていないの？

A：それは、やっぱりいろいろ旅とかをしているからじゃない？海外に興味があるしね。だって、よくいうじゃん。海外のパーティーとか出てさ、日本の人は、日本人だけ固まって、他の外国の人としゃべろうとしないとか。それは一つの特徴だよ。仲間意識でさ、日本のさ、自分たちに共有しているなにか、知識とかさ、経験とかを、持っていない人なかなか仲間に入れてあげない。それは逸菁が言う通りだと思うよ。結構そうなんじゃないの。偏見じゃなくて、そうだと思うよ。あると思うよ。もちろんそうじゃない人もいる。全体的に見ると、そういう特徴があるかもしれないけど、N君とかにしる、Tさんにしるさ、そういう特徴を持っていない人たちもいっぱいいるということ。

このインタビューでは、最初、A君の偏見を持ってもしょろがないという考え方にあまり納得できなかったが、A君と話していくと、偏見を持つことはそんなに悪いことではないかもしれないとだんだん思うようになってきた。私が自分の経験・体験に基づき、国の枠組みで人を判断することがよくないと分かった同時に、その経験・体験により、この国になんらかの傾向があるのではないかと思いがちなところがある。つまり、偏見を完璧になくすることができないのである。しかし、私が日本に来てから。親切な人に出会ったこともあり、そうではない人もいることが分かり、その経験により、自分の中に持っていた「日本人が冷たい」という先入観を変えることができた。このように、A君と話すことによって、「偏見を持たないことよりも、偏見があることを認めた上で、自分の積んできた経験・体験に基づき、それが偏見なのかを判断し、またいろいろ経験していきながら、自分の中の偏見を消していけばいいのだ」と思うようになった。

ここまでのインタビューは、A君の人に親切にする接し方という魅力の話とはだんだんずれていって、A君の魅力を感じたというより、A君の意見は私に異文化理解について改めて考えさせてくれたといえる。A君と話し合った結果、今まで自分を押し付けたプレッシャーから解放されたような気分になった。別にA君の意見を百パーセント同意していないが、その意見を消化した上で、異文化のすべてを受け入れるように無理せず、自分なりに異文化を理解し、自分の実際の体験・経験を生かして、もともと自分の中にある偏見や先入観をなくしていけばいいと思った。

3. 結論

今回のインタビューでは、私は親切にしてくれたA君を魅力的な人物として選んだ。最初から、A君が一人旅や留学などを体験したことにより、外国人に親切に接するようになったという答えを期待していた。インタビューではそれを確認するため、一人旅が人の接し方への影響にめぐって聞いていた。

インタビューの結果、A君が旅中、たくさんの人の優しさを触れたことから、自分も人

に優しくしたくなるということに、非常に共感を得て、A君の魅力を感じている。しかし、A君は人に優しくするという気持ちは、一人旅をしてからではなく、前からあったかもしれないと言っていた。確かに、私も留学中、たくさんの人に親切にされたから、人に親切にするという気持ちがすごく強くなった。だからといって、留学する前、私が全然人に親切にしないというわけでもない。そうすると、私が感じたA君の人への親切な接し方は、一人旅の影響ではなくなるかもしれないと思った。ここで、このインタビューを通して、A君の魅力は一体何なのかをもう一度考えてみた。

A君は一人旅を通して人に対する接し方が変わったかどうかにはあまり意識していない。それより、A君は一人旅を通して、ありのままの自分を素直に受け入れたことの方が成長だと思っている。ここでは私はA君の新しい魅力を発見した。A君が最初一人旅に対して、「自分を鍛えるための修行」のように考えていた。ある意味では自分に格好をつけ、プレッシャーをかけていたと言える。しかし、そのうち、「一人旅にこだわる」から「人それぞれの旅の楽しみ方があっていい」という考えに変わっている。結局A君は、自分はどこに行っても、変わらないことが気付き、自分を素直に受け入れるようになった。また、異文化理解に対する見方についても、A君は自分の中にもともとある文化背景を通して、異文化を理解し、自分の中にあるものを無理して変える必要はないと思っている。偏見・先入観に対しても、自分の経験に基づいた考えは偏見と見なすより、一つの見方として認めてもいいと思っている。

このように、A君が自分に変なプレッシャーをかけず、ありのままの自分を認めた上で、一人旅や留学などで積んできた経験を生かして、人や異文化を理解したり、人と接したりしているといえる。私は最初、一人旅をしているから人に親切に接しているA君の魅力を感じたが、今は一人旅の経験を生かして、素直に自分を受け入れるよう、人をより大事にするよう、人に親切にするように、自分の人間としての器を大きくしているA君の姿にさらに魅力を感じた。つまり、A君が一人旅をしているから魅力があるのではなく、A君が一人旅の経験を生かしているところに魅力があるのである。A君の人に対する親切な接し方はその経験を生かした一つの側面に過ぎないと思う。私も留学で出会った人や起きた出来事などの過程を大事にして、その経験を生かすことによって、人や文化に対する偏見を消すように、人や文化に対する理解を深めるように、自分の器をどんどん大きくしたいと思っている。

「一人旅とか留学とかをすることが大事なのではなく、その経験をどう生かすのが大切である」ということを私の結論としたい。

4. 終わりに

この授業では、自分の考えや書いたものを発表し、その場で他の人に批判され、また、評価されるなど、自分が魚のようにさばかれている気分であった。それだけでなく、他の

人が書いたものに対しても、コメントをしなければならなかった。ただ気軽にコメントするだけではなく、批判するならばその批判の根拠が求められる、コメントを具体化しなければならなかった。このように、この授業で行った作業（動機やインタビューなど）はすべてクラスで公表されるので、その場をごまかすだけの発言をすると、すぐに批判されるため、責任のある発言が非常に大事だと思うようになってきた。このような作業を行いながら、自分の考えが認められること、また、他の人に役に立ったことが分かり、達成感を味わうことによって、昨日（前）の自分より良い自分を目指すという向上心と、クラスに対して自分の役割を果たしたいという責任感が生まれてきた。

もちろん、良いことばかりではない。その反面、他の人と意見がぶつかったり、他の人が自分の考えを納得しなかったりして、自分がどこまで妥協すれば、どこまで言い張ればいいのか、その加減はどのように計るのかということに苦しんでいた。こういった時、授業の指導者の立場にある先生からの明確な答やヒントを望んでいた。しかし、先生は見守っていた。今までは、私は何事にも正しい答を求めていた。映画やドラマを見るとき、誰が正義の味方なのか、誰が敵なのかを頭に入れないと、ストーリーの展開を追っていけないタイプである。一言でいえば頭が固い人。しかし、この授業は私を少し柔軟にしてくれた。正しい答なんか存在しないのだ。答は相対的なものなのだ。人の考えとぶつかり、自分と向かい合うことなどのプロセスを経て、人の意見を尊重するようになり、自分のオリジナリティーを探り出すようになり、結局は最初から最後までなにもかも全部自分で判断するしかない。人の意見を取り入れて、自分のこだわりを確保して、その上で出したものは自分のオリジナリティーであり、他人と自分を絡めて出した相対的な答だと思う。だから、先生はただみんなを見守っていた。指導者の立場だからこそ、人のオリジナリティーの確立を干渉してはいけないのである。このことを最後の最後に悟った。

そして、なぜこの授業は言語文化なのか。この授業では自分の意見を述べるのが大事だとされている。自分の意見は言葉を通して表されるものである。また、このクラスのメンバーは、国籍も世代も性別も所属もそれぞれ異なっている。共通しているのは日本社会に暮らしていることだけ。私は今まで文化を国の産物として捉えていた。しかし、この授業を通して、同じ日本人でも異なる考えを持っており、日本人が語っている日本は必ず日本の文化とはいえないということが分かるようになった。そこで、このクラスのメンバーのそれぞれ持っている考え方、価値観を一つの文化として考えてもいいのではないかとと思う。クラスのメンバーはみんな自分の今まで積んできた体験に基づき、自分の文化を、言葉を通して他の人に伝えようとしている。そして、日本語という言葉を通して、他の人の文化と接触し、自分の文化との類似や差異などを理解し、それを自分の中に取り入れるか、自分から取り除くかという過程を経てから、自分の中の文化が、また新しく形成されるのだろう。このように自分の文化を確立する過程には言葉が不可欠な存在である。もちろん、目で観察することで理解することができるとも考えられるが、人とのぶつかり（コミュニケーション）なしでは結局自己完結な作業になってしまうのである。言葉を操って自分の

考えを相手に伝えて、相手がそれを受け止めて、なんらかの意見を言葉で返してくるなどのやり取りを通さなければ、自分の文化を再確立することができないと思う。このことはつまり、この授業で望まれている「自分のオリジナリティーの確立」といえるだろう。自分の言葉を通し、異なる体験を持つ人々と話し合うことによって、自分なりの文化を形成することがこの授業の目標であり、この授業が「言語文化」と名づけられている理由だと思う。極端な解釈かもしれないが、これは私がこの授業を通して正直に考えた言語文化である。

最後に、この授業で経てきたプロセス、体験したこと、勉強になったこと、悩んできたこと、築きあげた人間関係は、「私にとっての日本社会に暮らすこと」の縮図であることを記して、終わりとする。